

浄土

1979-11

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 通郵省 (郵便物承認) 第三五号
昭和五十四年十月二十五日印刷 昭和五十四年十一月一日発行
第四十五卷 第十一号

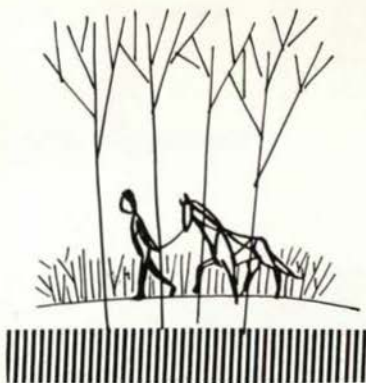


S. Kuz

積尊の誠しめより――

飲み友だちなるものあり

親友の中の親友なりと自称するものあり
しかれども必要の生ぜる時における友が
これ真の朋友である



太陽の昇れる後にも寢床にあり
他人の妻女になれ近づき

争いを常とし、無益の事に熱中し

悪友と交わり、常にむさぼりの心をもつ

これ人を破滅に導く道である

賭け事と女、酒、踊りと歌

白昼に臥し、時ならぬに盛り場をぶらつく

これ人を破滅に導く道である

積尊が、若き家の主人シンガラに対する
教訓として語られた言葉である。人間の性^{さが}は
二五〇〇年の昔も少しも変らぬものであった

のか。これらのいましめの言葉は、現代を生
きる人々への警告の言葉としても、何の不思
議もない。とすると、その間の科学、物質文
明の進歩発展に較べて、人間自身の精神、道
徳面での浄化、向上は皆無であったのである
うか。なるほど人間の社会は複雑、多様化し
て来た。新しい倫理も生れて来た。人々が精
神文明の発展、改革に努力して来たからこ
そ、今日の平和が保たれているということとは
できる。しかし、物質文明は更に発展して行
くことであろう。それらをあやつる人間の心
に、もしも間違いが起ったなら、例えば原子
炉を扱う人々の中のただ一人でも、心の平静
を失なったなら、結果は人間の終焉に連らな
るかも知れない。一方、人々はいつの時代に
も、賢い智慧をはたかせて、危機をのり切
って来たことも事実である。人間の良識とし
てある平凡な道徳律、それを積尊はいみじく
も説かれたものとして肝に銘じたい。

(佐藤良純)

十一月号



一念というは、これ上の念仏
の願成就の中に言うところの
一念と下輩の中に明かすところの
一念を指すなり。

——『選択本願念仏集』
(定本法然上人全集1 p.80)

目 次

法 話

- 信仰の力……………安 藤 雅 寛……(2)
(ず)(い)(そ)(う) つけものうまし……………竹 田 英 宣……(6)

- 随想■ 伊豆高原の秋……………木 下 隆 一……(9)

- 一日、善導大師と遊ぶ……………三枝樹 隆 善……(14)

〈連載〉

- 六時礼讃の「無常偈」に生きる(8)……………安 居 香 山 ……(20)
善導大師の生涯とその教え(11)
『観経疏』一定善義……………(23)

特 別 寄 稿

- 教化資料あさり雑記……………堀 隆 廣……(27)

〈読者の声〉

- 大乘仏教と法然上人……………上 野 浩……(34)
浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(32)
〈新刊紹介〉『埋み火』(大室了皓著)……………(19)
〈表紙裏・巻頭言〉釈尊の誠めより……………佐 藤 良 純
念仏ひじり三国志⑦——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



信 仰 の 力

安 藤 雅 寛
あん どう が かん

(大川市法泉寺中)

信仰というものは、力強いものである。人々が信仰に目覚め、同信の輪が生まれ、連帯ができると、素晴らしい力が生じる。その力は、時としては爆発し、また時としては心に秘められ、人間の歴史の中で、常に息づいて影響を与えてきた。私は、歴史の表面に出て、脚光をあびた信仰の力より、歴史の陰に、誰に強いられることなく、同信の輪を広げていった信仰に、より力強さを感じる。

全国には、各宗を合せて数万といわれる寺院が存在する。その中には、時の為政者や権力者によって、創建された寺院も、多数あるが、それ等も含め、今、現に存在する寺院は全て、名も無き民衆の信仰の力に護持された

ものである。信仰の裏づけの無い寺院は、どんな大伽藍の結構を尽していても、いつの間にか、荒廃し、礎石を残すのみに成ってしまった。例えば、聖武天皇の勅願によって、全国に創建された国分寺や国分尼寺が、鎮護国家の旗印の下に、巨額の費用と、龐大な労力とによって建立されたが、砂上の楼閣に似て、あるものは土中に埋没し、あるものは、雑草の中に礎石を残すのみとなり、土地の人々にも、いつしか忘れられてしまった。足利尊氏の創建に成る安国寺にしても然りである。か弱い民衆の資財や労力によって、建立された寺院は残り、強大な権力によって、建立された寺院が、消え去った事実を

見るとき、信仰の力の偉大さを痛切に感じる。

念仏は、万機普益ばんきふやくの教えである。奈良や平安の仏教の如く、国家や貴族の爲のみの教えでは無い。罪根深き、煩惱具足せる人間救済の教えである。「おおよそ、仏教おおしといえども、所詮戒定慧の三学をばすぎず。所謂小乗の戒定慧、大乘の戒定慧、顯教の戒定慧、密教の戒定慧也。しかるに、わがこの身は、戒行において、一戒をもたまたず、禪定において、一つもこれをえず」と、法然上人自身の罪惡深重の凡夫としての、御述懐の中より、善導大師の御指南により開かれし、諸仏証誠の教えである。万機普益ばんきふやくとは、老少男女全ての、いかなる人、簡単にいえば、全人類一人残らず、利益りやくを蒙ることができることである。念仏は、阿弥陀仏の本願、釈尊出世の本懐、六方諸仏の護念されし、いつ、どこで、だれでも、念仏することができ、臨終の夕には、必ず浄土へ往生させていただく、諸行に勝れたる行である。

国民榮譽賞に輝く作曲家、故古賀政男氏は、愚生の住する福岡県大川市の出身である。懐メロブームと呼ばれ

る昨今、俗に「古賀メロディー」といわれる氏の作曲に成る数々の歌謡曲は、カラオケ流行に乗り、在生時代以上に国民多数の人々に歌われている現今である。私は、一連の古賀メロディーの中でも、「影を慕いて」を愛唱し、法話でも引用する事が多い。つい先日、古賀政男展が、当地に於て催されたが、その折、氏の色紙(勿論、複写印刷が販売されていたので購入してきたが、墨跡鮮やかに「影を慕いて」と書かれていた。当地には、氏の影を慕いての楽譜入りの歌碑が在生中に建立されている為に、主催者側の配慮によるものかも知れない。それにしても、老若男女を問わず、「影を慕いて」を愛唱する人は多い。

まぼろしの 影を慕いて

雨に日に

月にやるせぬ わが想い

つつめば燃ゆる 胸の火に

身は焦れつつ しのび泣く

古賀氏自身の作詞作曲に成るこの曲は、戦前、戦後を通じて、世代を超えて愛唱されてきた。平易な歌詞の中に、悲恋の万感が込められ、単純なメロディーは哀調を

呼び、いっどこで聞いても、歌っても、胸中に熱きものを覚えるのは、何故だろう。この「影を慕いて」に代表される古賀メロディーに対して、近頃流行の新曲は、どんなに趣向を凝した、オーケストラの演奏で、派手な衣装や、身振りで歌っても、空前のヒット曲と騒がれ、売上げ百万枚といわれても、数カ月の命しか保ち得ず、いつの間にか消えて忘れられる。何か現代社会の人心を象徴しているようだ。

現代社会は、「物に榮えて、心で亡びている」と、よく言われている。科学の進歩に伴い、物質万能の時代となり、特に、日本に於ては、戦前、戦後の物資不足・窮乏生活を知っている人は、国民の半分以上となってしまった。終戦後生れの人が、日本国民の過半数を占めているからである。或る人に言わせると、現代の日本人の大多数は、「キカンボウ族」と称し、漢字で「飢寒乏族」と、当てるそうである。つまり、飢えも、寒さも、貧乏も知らなく、ヌクヌクと生活している人間で、忍耐力も、持続性も無く、有るのは、権利の主張と、利己追求で、物質欲の権化であるような。法然上人の法語「凡夫の心は、物にしたがいてうつりやすし、たとえば猿猴の

枝につたうがごとし、まことに散乱して動じやすく、一心しずまりがたし」そのままの、物質に、精神まで支配された人間であるような。

まぼろしの、影を慕うことのできる日本人が、いつの間にか、物を慕い、物に従う日本人になりつつあるのは悲しい現実である。しかし懷メロや古賀メロディーの流行は、物に榮えて、心で亡びつつある現代日本人の無意識の心の回帰であり、ささやかな抵抗ではなからうか。

数年来、仏縁をいただき、各地に法座を与えられ、いろいろな同信の友に逢う機会が多い。同信の友とは、有難いものだ。一期一会を喜び、種々の信仰体験を披露し、時には、悩みさえも相談していただくことがある。

最近九州の或る山村の寺より、二泊三日の法縁をいただいた。二日目の説教が終り、一息ついた頃、案内もなく、一人の老人が、部屋に入ってきた。「お説教師さん、退屈じゃろうと思うたから、慰問に来ました」。額に年輪のような深い皺を刻んだ、胡麻塩頭の、色黒い顔に、眼ばかり大きい、山男然としたその人の手には、二合瓶が握られていた。「お説教師さん、一緒に一杯やらせてもらおうと思うて、一本買って持ってきました。一級酒

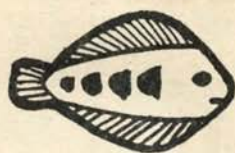
じゃけ、飲んでくだされや」顔に似合わぬ若々しい声である。「それはどうも、有難うございます。どうぞ、こ

ちらへ」無儀にも、その人は、立ったままの挨拶であったが、私の言葉を聞くや、眼を細めて坐り、「俺は、この寺の檀家の〇〇と云う者で、この寺の世話役させてもろうてます。その世話役も、今年からです。この年令になつて、やっと、寺に足が向き、ご信心を、何とかご頂戴しております。いつの間にか、私の湯飲み茶碗を引き寄せ、酒を滴きながら、話しをする口元は、熟柿臭かった。「説教師さん、早よう飲んで、お流れくだされや、お流れ貰わんと、歌も出せんでな」白磁の見事な茶碗を大きな黒い手で差し出し、私に好意の眼差であらう、一層眼を細めて、私の口元を見つめていた。今でも、あの白磁の茶碗と、黒い手の、絶妙なコントラストが、眼を閉じると思い出される。その老人が、二合瓶を空にして、山で鍛えた美声で歌ってくれたのが「影を慕いて」であった。別れ際に「説教師さん、この歌は、片思いの歌ですな。人間は勝手な者ばかりですな。片思いする心を持って、片思いの苦しみを知っているくせに、阿弥陀さまに、片思いをさせて、知らん顔しとる。私も、この

間まで、そうじゃった。だが、今は、阿弥陀さまと相思相愛、相惚れじゃ!!」

後で、ご住職に聞いた話によると、この老人は、二三年前まで、爪はじき者であったとの事。仕事に勢出すが、酒飲みで、信仰者には、足蹴に悪口雑言。「神も仏も、この世には居ない。戦争に勝つよう一億総国民がみんなに一心不乱ご祈願したのに、戦争は敗れた。神も仏も、俺達の願いを叶えてくれなかった。そんな神や仏を拜んでも、何にもならん」。その老人が、一人息子は、都会で所帯を持っしまし、老妻に先立たれた時、通夜の席でご住職の法話をいただき、「何はともあれ、まず念仏申せ!」の一言で、破れんばかりの高声念仏、亡妻慕うての念仏が、今では、阿弥陀さまと相惚れの念仏と自認しているそうである。今でも酒は昼からでも飲むが、世話役に推される程の、信仰者だそうだ。万機普益の念仏の証しとして、「阿弥陀さまとの相惚れ」を尊くご頂戴させていただいた。阿弥陀さまに片思いさせている我々を反省し、万機普益の念仏同信の輪を広げることこそ、日本人の「飢寒乏族化」を救う道である。

(す)
(い)
(そ)
(う)



つけものうまし

竹 たけ
田 だ
英 えい
宣 せん

(天理市善福寺住職)

魚津市のS寺へ三日程お世話になったことがある。食事ごとにおいしい漬物をだしてくださり、漬物好きの私は大いに賞味させて頂いた。

漬物は寒い地方で工夫された保存食であるときく、S寺の奥様は信州のお生まれとか、道理でおいしい自家製の漬物をおつくりになるはずだと知った。信州はことのほか漬物のおいしいところで、その人々は上手に工夫して漬物を仕込まれるらしい。

若い頃に年の暮れになると例年の如く、信州野沢温泉にスキーに出かけていた。雪国の情緒とあの有名な野沢菜の漬物にひかれて、年末になるときまったように、北陸線まわりで信州に入った。

気温のさがる夕暮れ、アイスパンの雪を踏みしめて宿へ帰り冷えた体を温泉であたためたあと、酒の友に洋食皿に山盛りの野沢菜をバリバリとかみしめる素朴な味はなんとも名状しがたいおいしいものである。スキーはあまり上達しなかったが、すっかり野沢菜のとりこになってしまった。

先年大阪のデパートで、信州物産店で懐かしい人に出合ったように、野沢菜を求めてさっそく酒と共に賞味した。ところがどういうわけか、いやに塩辛さがめだって期待をうらぎられたことがある。スキーのときのようにスポーツのあとでないからなのか、それとも大阪への出荷で塩をきかせてあったのだろうか。その土地のものは、その土地で味わりにこしたことはない。地のあじというものであろう。交通機関の発達などで、便利さがつい優先していることを、私どもは反省せねばならない。

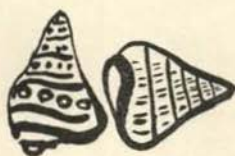
私の家では漬物は父の仕事ときまっていた。シーズンになると近所の農家より、頒けてもらった大根漬けをするのが例年の行事であった。いやあれば隣りより頂いていたのかも知れないが……、真白い大根を幾本かの束にして何日も天日に干す。やがて大きな四斗樽

に大根を一面にならべ、塩をふり、糠をかけ、また大根をならべていく。父が櫛がけの姿でイキイキと動いていたことが、幼ない頃の想い出として鮮明に残っている。

やがて、妻がきてからは父と妻の仕事となり、大きい身体の父と、小柄な妻とが申し合わせたように息のあった仕事ぶりで、つぎつぎと大根が四斗樽にうまっていった。母と私はいつも見学役であった、夫妻とおもしろいもので、片方がせずにいるとつれ合いがせつせとするものである。いや片方がするから一方がしないのかも知れないが……。然し漬物はどうも「漬け手」があるのではなからうか。

そして、おいしい大根漬けが我が家の食卓を一年中うるおすことになる。何も手伝わずに、始終見やくの私は、漬物作業の終った夜、洗い清められた重し石の幾つかが、ツヤツヤと四斗樽の上で輝いているのが印象的で今年も秋が過ぎたなあ、など思っているのだった。

今、わが家では漬けものはもっぱら奈良漬か、店屋ものばかりである。見やくの母と私が残って、父も妻も既にこの世になくお浄土にかえってしまった。他家さまでおいしい漬物に出合うたびに想い出しているのである。もちろん、四斗樽も我が家から姿を消している。ああ、つけものうまし、なつかし。



伊豆高原の秋

きの
した
りゅう
いち
木下隆一

(随筆家)

○

ひとり娘のひろみがインディアナ州リッチ
モンドにあるアラムカレッジという小じん
まりした私立大学へ入学してから、初老の夫
婦は伊豆高原の秋を三度迎えた。

高校の時からアメリカへ行っているので、

娘がいらない淋しさは別に感じないが、今年は
サマーセツションを取ると言って帰って来
ず、ひと夏カリフォルニア州サンディエゴの
高校時代の同級生の家にお世話になって、久
し振りに会った友人たちと交歓したり、大い
にエンジョイしたようであった。そうになると
音信も滞りがちになる。週に一度は必ず手紙

を出すようにというのがアメリカ行の条件だったから、十日も来ないと気になってつい電話をかけることになってしまふ。

「冬休みには帰って来いよ、」

別の用件で電話をしたついでに言うと、

「ハイ」

と、一応つましやかな返事は返って来た。娘の声を聞けばそれだけで安心するのだから、親馬鹿もいいところである。

さて、伊豆高原の秋であるが、昭和五十二年、つまり第一回目の秋は惨憺たるものだった。八月の終りにひろみが発ち、ニューステューデント・ウィークなるものを見て来ますと言って、女房も一緒に行ってしまった。

そのあとが大変だった。新築して間もなしの家で、周囲にぼつりぼつり別荘が建っている雑木林の中の一軒だったので、静かなことは静かだったが、虫の多いのには閉口した。シューシューやっているうちに、殺虫剤の買置きは忽ちすべて空になってしまった。

あいにくの長雨それも暴風雨で、暑くても窓を開けることも出来ない。一番弱ったのは洗濯物が乾かないことだった。その上迷走台風の余波まで来て、買物に行く気にもなれず、しまいに水ばかり飲んで暮した。女房を羽田に迎えに出た時、久し振りに飲食店のショーウィンドウを見たらなんでもうまそうで、我れながらさもないあと嘆いたことであつた。

ひろみ去って伊豆高原の秋に居り
淋しきは庭に散り敷く櫟の実

その秋の感慨である。

私が俳句を始めたのは高校二年の時である。友人の父に手ほどきを受けたのが病みつきとなった。以来三十年近くなんとなく続けているが、一向にうまくならない。というの

は、私の俳句はどちらかというとメモの要素が強いからだろう。他の人には文字の羅列と映しても、私には貴重な一行なのである。日付けと句を書きとめておけば、充分日記の役目を果してくれるのである。

去年の秋はどうであつたらうと句帳を開いてみると、ひろみは九月七日に成田を發っている。この年は律儀にも秋は九月一日にやつて来た。こんなにもびしゃりとした季節の移り変りを私は知らない。

秋来ぬと肌^{はだ}に感ず厄日かな
久々に雨降る九月二日かな

これらの句の前には秋暑しとか秋ひでりとかいった句が並んでいる。二日の雨は本当に久し振りでたつたのである。そして七日、ひろみはひとり午後七時三十分発の日航機で翔び去った。五日の月のきれいな宵であつた。

爽かな目覚め日本を發つ日なり
秋うららトランクの物詰め直す
爽かに台風それし空へ翔つ

台風の接近が心配されたが、はるか東方海上にそれてくれた。いま頃は台風の上あたりを飛んでいるのではなからうかと思ひながら作つた句であつた。



二年目の秋になると、前の年には見えなかつたものがよく見えて来るから不思議である。三、四本しか目につかなかつた山栗の木が、二年目にはあきれるほど見つかった。別段拾つて食べるわけではないが、飢えを体験した戦中たそがれ派としては、見ているだけで心楽しくなるのである。朝早く近所の子供が長い竹竿で叩き落していた。なるほどこうして取るのかと納得した。これも収獲の一つ。常山木^{くさき}の紅い萼がはじけて瑠璃色の実を

のぞかせるのもこの季節。そして思わぬところに山柿の実が熟れていたりして、鴉が来て食べていたりする。鴉が食べるくらいだから、きつと甘いに違いない。朝わずか十五分足らずの散策だが、歩くたびにいろいろと新たな発見があつて楽しい限りである。



三年目の今年の秋はというと、まだ殆ど紅葉も黄葉もなく、意外に秋は長引くようである。寒いのは苦手だ。

畠の千成りトマトは毎朝赤い実を食卓に提供してくれるし、ピーマンも元気に瑞々しい実を成らし続けている。ただ先日蒔いた芥子菜と蕪は、芽が出た途端に茶色のテントウ虫に似た害虫にやられて全滅してしまつた。蒔く時期が早かつたのかも知れない。

金木犀は慌しく雨に散つてしまつた。垣根の山茶花の根元に植えた茶の木は、今年は八月半ばかり花をつけ始めいまが満開である。

山茶花はこれからだが、蕾が沢山ついでいるので今年は長く花を楽しめそうである。

無住の山荘の垣根や前庭にぼつぼつ菊も咲き始めた。常住して丹精したわけではないから、大輪や懸崖の菊は見当らない。小菊ばかりである。おそらくこれらの菊の多くは、主人に鑑賞されることもなく枯れて行くのである。しかし、小さくても菊は菊である。菊の馨を漂わせている。朝露を含んだ菊は特に匂いが強いようである。

菊の香に浸っているうちに、急に京都へ行きたくなつた。たまらなく行きたくなつた。京都へなにをしに行くか自分の胸に問うても、答は返って来ない。しばらく歩いては、たと思ひ当つた。広隆寺の、弥勒菩薩の微笑が見たかつたのだと……。

この仏様、木彫ながら金銅仏を思わせる肌の色がいかに優美である。作られた年代も不明なら、作られた場所も不明で諸説あるということだが、そんなことは私にはどうでも

いいことであって、ただ天平の仏として、あの半跏思惟像をこよなく愛するのである。

広隆寺の弥勒さんには、菊の馨がよく似合うような気がする。

秋の白い日がこぼれる広隆寺の境内を通じて堂内にはいると、一番奥まったところに、弥勒さんは菊の香に包まれて、右手を頬に当て、右足を膝の上に組んで、ややうつ向き加減に永遠の微笑を浮べて、ひっそりと坐っていて、急にたまらなく京都へ行きたくなったのであった。

天平の仏は菊の香を纏ふ



今年もやがてまた時雨の季節が来る。この頃になると、私は佐藤春夫の「秋の女よ」という詩を思い出す。

泣き濡れて秋の女よ

わが幻のなかに来る

泣き濡れた秋の女を

時雨だとわたしは思ふ

（佐藤春夫詩集「より」）

伊豆高原の時雨は、大抵大室山の方から降って来て、雑木林の上を通過して城ヶ崎の海へ抜ける。さほど強い降りではないので、しばらく木の下で雨宿りしていればまず濡れることはない。黄葉した林に、薄い紗をかけて通り過ぎて行く時雨には、言うに言われぬ風情がある。

佐藤春夫が時雨を秋の女と実感したのは、雑木林に降る時雨を見た時ではなかっただろう。時雨には、特に雑木林に降る時雨には、泣き濡れた秋の女のイメージがまことに相応しいのである。

紗の幕を降ろし時雨の舞台かな

一日、善導大師と遊ぶ



みえき りゅうぜん
三枝樹 隆 善

(仏教大学助教授)

ここ数年来、善導大師のブームである。それは明年に善導大師の千三百年の御遠忌をお迎えするからであろう。浄土門の人たちは、大師の芳躅を慕い、遺徳を顕彰する目的のために全力をそそいでいる。

浄土宗ではいち早く、善導大師遠忌局を設けて旗をかかげ、あるいは教学面、布教面における研鑽や大講演会、あるいは報恩行としての日中友好浄土宗協会の祖蹟参拝、尊像の建立や墓塔前の納経などの運動を活発に展開している。

善導大師は、周知のとおり、西暦六一三年から六八一

年にかけての六十九年間、中国初唐に生存して活躍された仏教の高僧である。中国では弥陀の化身と伝えられ、日本では半金色の聖者、白道の聖者として讃仰されている。法然上人が、善導大師を弥陀の化身として渴仰思慕されたことはあまりにも有名であるが、「偏に善導一師に依る」といって、浄土宗を開創された。法然上人は、その根本精神によって、ただ日本のみならず、全世界の人びとに善導大師の教えを普及せしめて、世界人類の救済と和平を願われたのであるとおもう。それは、善導大師が人生に苦しみ悩む全人類の救いを阿弥陀仏の本

願力に求めて釈尊の御ころを開顯せられているからである。

一般に、善導大師の著作を五部九卷と呼んでいるが、それは善導大師の信念と言うべき「自信教人信」の発露であって、いずれも浄土教の信仰書であり、また浄業実践のテキストである。いまここに御遠忌をお迎えして、善導大師の遺徳顯彰の報恩行もさることながら、浄土願生の自行実践こそ、また善導大師の御ころにかなう行為であることも忘れてはならない。

おもうに、



善導大師御影（金勝、阿弥陀寺蔵）

善導大師は『観無量寿經』によって、釈迦牟尼仏と阿弥陀仏の教えをうけて、どんな人でも苦しみのない、真実の世界に生まれかわり、永く楽しむことができる道を発見せられた。これは大変な喜びである。そのように生まれかわるには、いったい、どのような行ないをしたらよいのか。これについて善導大師はいろいろと思考せられた。そしてその一つの方法として、お救い下さるみ仏のみ名を称えて御徳をたたえ、すなおにひれ伏す行いが最もよいことに気付かれて、『往生礼讃偈』一巻の書物を著わして、平生の行儀作法を指導せられた。『往生礼讃偈』とは、往生礼讃の詩（うた）であり、往生とは生まれかわることであり、礼讃とは礼儀をつくしてたたえることである。それは（身）とことば（口）の二業をもって、み仏の御徳をころから讃歎供養する行ないである。善導大師は、みずから生まれかわることを願いながら、また多くの人がとに、このすばらしい宗教の行法をすすめられたのである。西洋の哲人は「宗教は歌うべくして説くべからず」といってい

る。讃仏の歌は、まさしく人びとをして悠久の世界に逍遙せしめるのである。なんと、すばらしい宗教の行の境地であらうか。

というように、わたくしは感ずるのである。

実はわたくしは、昭和五十二年の六月から、毎月一回ではあるが、この行の境地を体得するために、六名の同信同行を募って、一日、善導大師といっしょに遊ばせていただくことにしたのである。称して青蓮社白道会とした。

善導大師の忌日と定められている十四日は、月の中旬で多忙のゆえに月末の二十七日をとってその前後に行法の実践をおこなうことにしている。同行とくに六名にしたのは、六時礼讃と六字名号に由来するものである。この行は同信同行の信心を堅固ならしめるためなのであるが、この際に行の法衣を一定することにしたのである。それは粗末ではあるが丈夫な金剛紗をねずみ色に染めて、礼拝が行ないやすい切素絹の衣にし、袈裟は麻の木蘭色にして九条に仕立てた。これを白道衣と呼ぶことにしたのである。この白道衣は、やがて現生尽きて大往

生の時も着用することになるであろう。

礼讃の実修は、最初は練習のようなものであったが、実修にともなう法具も徐々に揃い、回数を重ねるうちに作法も身につき、音調も定まり、信心の感動をおぼえるほどになってきた。ありがたいことである。自行は化他に及ぼさなければならない。ちなみに、白道会の差定を紹介しておきたい。

善導大師六時礼讃誦法

奉請四天王（節付）

奉請四天王 直入道場中

奉請師子王 師子亦難逢

奮迅身毛衣 衆魔退散去

回頭請法師 直取涅槃城（法事讃）

結文集（代表）

善導大師の千三百年大遠忌を迎えるに当り爰に大師の遺徳に誠を至す同信同行が洛北西念精舎に結集して六時礼讃の筵を敷く名づけて青蓮社白道会と称し願生の

信心を倍養せんと欲す

冀くは臨終の夕べ正念往生の望みを遂げんことを

香 偈

願我身淨如香爐 願我心如智慧火

念念焚燒戒定香 供養十方三世仏（法事讃）

敬礼三宝

道場大衆裏相与至心敬礼 南無常住仏

道場大衆裏相与至心敬礼 南無常住法

道場大衆裏相与至心敬礼 南無常住僧（法事讃）

三 奉 請

奉請弥陀世尊入道場

奉請釈迦如来入道場

奉請十方如来入道場（法事讃）

作 梵（節付）

如来妙色身 世間無与等

無比不思議 是故今敬礼

如来色無尽 智慧亦復然

一切法常住 是故我帰依（往生礼讃）

前懺悔文

今日道場難得遇 無上仏法亦難聞

畢命形枯断諸惡 従是念念罪皆除（法事讃）

十 念（代表）

開 經 偈

念念思聞浄土教 文文句句誓当勤

憶相長時流浪苦 専心聴法入真門（法事讃）

十四行偈

本文抄略（玄義分）

自 信 偈

自信教人信 難中転更難

大悲伝普化 真成報仏恩（往生礼讃）

十 念（代表）

六 時 礼 讃

日 没（礼拝）

初 夜（散華・行道）

中 夜（礼拝）

後 夜（礼拝）

晨 朝（礼拝）

日 中（散華・行道）

広 懺 悔

本文抄略（往生礼讃）

消除 偈

声声連注滿十念 念念消除五逆障
諦法闡提行十惡 回心念仏罪皆除（般舟讃）

十 念（代表）

発 願 文（節付）

本文抄略（往生礼讃）

光 撰 文

光明名号 摂化十方（定善義）

念仏一会

回 願

南無阿弥陀仏 願往生願往生 ○誉○○

（順次回願する）

高祖光明導導大師報恩謝徳（代表）

総回向文

願以此功德 平等施一切

同発菩提心 往生安樂国（玄義分）

十 念（代表）

專 念 偈

一切善業回生利 不如專念弥陀号

念念称名常懺悔 人能念仏還憶（般舟讃）

三 婦 礼（節付）

婦仏得菩提 道心恒不退願共諸衆生

回願往生無量寿国

婦法薩婆若 得大総持門願共諸衆生

回願往生無量寿国

婦僧息諍論 同入和合海願共諸衆生

回願往生無量寿国（往生礼讃）

送 仏 偈

請仏随縁還本国 普散香華心送仏

願仏慈心遙護念 同生相勸尽須来（法事讃）

十 念

以上。

『浄土』誌の購読希望者、新会員のご紹介を広く
お願い申し上げます。四月号より、新たに年会費を
二五〇〇円に値上げさせていただくようなことにな
りましたが、なにとぞ暖かいご配慮をお願い申し上
げます。

法然上人鑽仰会

『新刊紹介』

埋　　み　　火

大　室　了　　皓　著

『埋み火(うずみび)』という、B六判、一七四ページの随想集が評者のもとに送られてきた。ひそやかな掌中の短文集を集めたもので、「美しいもの、埋み火のようにやさしく心を暖めてくれるもの、そういうものに多く触れるように努めたい」という著者の想いが、本書の表題ともなり、また短文の随想集としての出版にもつながったという。しかも著者は家人から、△烈道△という紳名を拝命されるというほどに、けだし性格の激しい情熱的な人柄らしく、およそ表題のような細かい、ほのかな鬱悶気を持つ人とは随分と違うらしい。その著者が、折々の所感を静かに、穏やかに書き留めて、ほとんどが一ページにおさまるような珠玉の小文集としてまとめられたのである。というのも実は本書は著者積年のハガキ伝道集・法話通信集の精華だからである。

さて、その本書の著者は大室了皓師。東京・上大崎の光取寺住職としてよりは、むしろ長年に渡って中等英語教育に尽力され、NHK教育放送の英語講座などですでにおなじみの方も多からう。その著者が、いわば浄土念仏信仰実践の心の軌跡として、さらにはその心の証しとして、折に触れて感じられ、また思索されたエッセンスを書き綴られた、その一つの集成が本書である。全篇は、十八章百二十の小文を集めた法話集であり、「諸行無常」「三界唯心造」「布施(ほどこし)」「その日のために」「恵みを享けて」……と題された各章題が、著者直筆の端正な毛筆で挿まれているのが、何とも本書の気品を感じさせるところである。惜しむらくは、今はその一々の内容を紹介する余裕がないので、とくに第十四章「心」の項におさめられた文章の中から、

以下抜き書きして、本書の香りの一端をお伝えしてみたい。

——「去っていく人のうしろ姿に深々と頭を下げる人は、また心の眼を開いている人である」△うしろ姿に▽・「理屈は頭で通じるが、人を動かすことはできない。思いをこめて胸を使い全身であらわしてこそ心が通じ、人をも動かすものだ」△心のありか▽・「与えられることに深い感謝と感激を親が持たなければ、感動する子供は育たない」△感激のない子▽・「心を軽くすることこそ長寿の秘訣だろう」△心の重荷▽・「黄金の部屋に通されても、美しいと感じるとは限らない。質素な部屋でも住む人によって黄金に見えてくる」△住む人によって尊し▽・「我があるから心が重くなる。領分を弁え、我という荷物を捨てれば軽くなる。軽ければ浮き立つ。そして運もまた浮かぶだろう」△荷物▽—— (原)

(発売元)

〒151 東京都渋谷区笹塚一―四七―一
韓国税解説協会 TEL(03)3461-5551

■六時礼讃の「無常偈」に生きる■

— 八 —

— 日中無常偈(上) —

やす
安 居 香 山
い こう さん

(大正大学教授・文博)

○

善導大師の六時礼讃について、「無常偈」を拝読しつつ、そこに流れている大師の精神を探り、これを私の生活にどのように生かせばよいかを考えている中に、日中礼讃までできてしまいました。特にここでは、その中の「無常偈」を中心として、その真意のあるところを拝読してきたのでありますが、われわれに語りかけられる大師の強い言葉が、いかにも身にしみて、なるほどと感ぜしめられるものであります。

ここで取りあげます日中礼讃は、浄土宗にとりましては、特に親しみ深い、そして有り難いものであります。

で、従って、その「無常偈」も、大いにみなさんにもなじみ深いものであると思います。

と申しますのは、今日浄土宗では、特別な法要なり行事などの外は、六時礼讃を、六時に行うということは、殆んど為されておりません。前にも申しましたが、京都の法然院あたりで、僅かに常時に行われている程度であります。しかし、この日中礼讃に限っては、日常の法要や、行事に、浄土宗ではよくあげられております。勿論これを全部あげることは、時間的にも相当かかりますので、その一部について、これを「三尊礼」としてあげることになっております。

三尊とは、弥陀・観音・勢至のことでありまして、日

中礼讃の上音の部に、七言律詩の形で、三尊の徳を讃えたものがありまして、これだけを取り出して「三尊礼」として、法要などによくあげるものになっています。そして、最後に、「日中無常偈」をつけてあげるのが、ならわしであります。

礼讃のふし廻しは、どれも同じような調子ではありませんが、なかなか有り難いものであります。とくに日中礼讃は、いつもあげるといふこともあって、馴みが深く、又その調子もよろしくて、私などはこの上なく好きなお経であります。浄土宗のお経の中では、一番よいものではないかと、私なりに考えています。

毎夏私は、大正大学の女子学生の実践仏教について行きますが、若い人びとにこのお経を教え、一緒に称えながら行道をします。行道というのは、お経を称えながら、み仏の周りを廻るものです。丁度、音曲が行道にもあって、女子学生たちは、とても有り難いと感激をしてくれます。今の若い人はリズムをすぐ覚えますので、その意味内容はとも角として、お経を大きな声で、そろって称えながら、み仏の周りを廻るということは、いいしれぬ有り難さに、日頃の騒がしい人生も忘れ、寂靜の中

にしみじみと、人生を考え直す機会となるようであります。

比叡山に西塔黒谷というところがあり、青竜寺という天台の寺があります。そこに知恩院が青少年練成道場というものを造っておりまして、大学でもここをお借りして、学生の実践仏教を行います。女子学生の修練もここでやるわけであります。ここは、法然上人が長く滞在して勉強された聖地ですが、更に上人が、善導大師のご著書のお導きによって、浄土宗の念仏の教えを開きなされた霊跡でもありまして、われわれとしましては、忘れることのできない大切なところであります。

そこには、森妙澄尼という年老いた方が、猷身的な仏前奉仕をして、厳寒の冬でも、聖地をお守りになっておられます。私も毎年ここにお邪魔して、いつも身のひきしまる感激をしてくるのであります。

この青竜寺の本堂が、昔風の建て方になっていて、阿弥陀如来の周りを行道するのに恰好の形になっております。決して豪華なお堂ではありませんが、何百年もの星霜を経たこのお堂で、三尊礼を唱えながら行道することは、この上ない感激を覚えるものであります。

とくに、この日中礼讃は、善導大師ご自身が、いろいろなお経を参考として、作られた、いわばご自作の礼讃とされるものでありまして、それだけに何かよけいに身近に、大師の尊さを感じるものがあります。

ここでは、参考までに、弥陀如来の徳をたたえたものを掲げて、その内容を紹介させて頂きます。これは又、「一尊礼」として、これだけをあげることもあります。

(一尊礼)

(大木惲夫訳)

弥陀身色如金山

弥陀のすがたは金山か、

相好光明照十方

照らしてやまず、十方を、

唯有念仏蒙光摂

そのみ光を蒙るは、

当知本願最為強

ただ念仏によりてのみ、

六方如来舒舌証

六法如来、舌を野べ

専称名号至西方

専らに御名を唱うれば

到彼華開聞妙法

西に到ると証さずや、

十地願行自然彰

蓮の台に法を聴き

願共諸衆生

十地の願行かないなん

往生安楽国

いざや諸人もろともに

安楽国に生き往かん

安楽国に生き往かん

み仏の威力によって、お念仏を唱えれば、必ず浄土に

往生できるという浄土宗のみ教えが、この一節の中にくまなく折り込まれています。善導大師は、いままで度々申しましたように、われわれ人間の赤裸々な、真実の姿を、ご指摘になりました。そして、そうであるからこそ、人生の何であるかを自覚して、念仏を唱え、真に生きる道を発見することを教えました。この一節にも、これは脈々として、そのみ教えが流れているわけがあります。そして、相変らず、大きな声で呼びかけられ、「いざともに、行こうではないか」と、おさそいの声をかけられているのであります。

こうした内容のお経を、ふしをつけてあげると、又ひときわその有り難さに、感を深くするのであります。こうして、日中礼讃では、同様に、観音、勢至二菩薩のお徳を称えながら、日中にこのお経をあげるのであります。

それは、日没から始めて、深夜に到り、明けの星と共に晨朝礼讃をあげて、いよいよ締めくくりの日中にと入ることになります。そして、最後のフィナーレともいうべき、「日中無常偈」へと到りつくこととなります。

(つづく)

■善導大師の生涯とその教え■——十一——

◇ ◇ 『観経疏』—定善義— ◇ ◇

観、観音観、勢至観、普観、雜想観の十三観について解説されています。

前回において述べた「序分義」の終りのところに、イダイケ夫人が仏滅後の衆生は、どうして浄土を観見することができると尋ねたのに対して、仏が極楽の依正二報を観察する十三の観法を説明された一段があります。

これが「定善義」であります。これはイダイケ夫人の請いによりて説かれたものでありますが、夫人は、はじめからお念仏を説かれることをのぞまれたわけではないので、まず定善を説き、つぎに散善を説かれて、最後にお念仏に導かれるのであります。

この「定善義」には、『観経』の日想観、水想観、地想観、宝樹観、宝池観、宝楼観、華座観、像観、真身

善導大師以前の諸師たちは、『観経』の正字分に明かされた十六観を、ことごとく定善とし、日観より宝楼までの六観を依報観、華座より勢至までの五観を正報観、普観は上の所観の浄土に、自身往生の想いをなしてこれを観ずるから自生観と名づけ、雜観は鈍根のために丈六の小身を観ずることを開き、おわりの三観は九品の機が往生するすがたを観ずるから他生観と名づけて、上来的十六観をみな定善とするのであります。

これに対して善導大師は、十三観のみを定善とし、九品を散善と定めました。この十三観について概略のすべて見ようと思います。

まず一の日想観は、浄土を観ずる予備として、日没の

相を観ずるのであります。文は五つに分けていますが、

「はじめに心をとどめて直ちに西方を指して余の九域をえらぶは、これをもって身を一にし、心を一にし、廻向を一にし、廻を一にし、境界を一にし、相統を一にし、帰依を一にし、正念を一にするなり」とのべています。

日想観を修行する理由として、一に、衆生をして境を悟って心をとどめしめること、二に、みずからの業障に軽重のあることを知らしめること、三に、弥陀の依正二報の莊嚴が、日輪に百万倍超過することを知らしめることをあげて、結跏趺坐の方法から観想の方法までを、こまかく示しています。

二の水想観は、浄土を観ずる予備として、浄土は平等にして、内外映徹することを観知せしめるものであって、文は六つに分けています。観想の方法をくわしく説明し、浄土の地下の莊嚴、地上の莊嚴、空裏の莊嚴などを明かしています。

三の地想観から真観です。文は六つに分けられています。心をつづけますと、浄土のすがたを見るのができ、正受と相応して三昧を証することを説

いて、観の利益を明かしています。

四の宝樹観は、十に分けて積されていますが、七重宝樹の飾りのすがたは、法蔵菩薩の因力によって自然にあらわれたことが述べられ、これを観ずる方法も明かされています。

五の宝池観は、十に分けて、浄土の宝池観を積していますが、池底は、「雑色の金剛をもって底沙とす」とあるのを積して「金剛とはすなわちこれ無漏の体なり」とのべています。このことより、浄土は無漏の境界ということがわかるのであります。

六の宝楼観は、十一に分けられて、宝楼の莊嚴について明かにしております。

つぎに、七の華座観についてみますと、これは十九に分けて、華座の観法が明かされています。『観経』には、華座観を説くはじめに、仏がイダイケ夫人に対して、「汝のために苦悩をのぞく法を分別解説すべしと仰せられしとき、無量寿仏が観音勢至とともに空中に住せらる」という一文がありますが、これは、七観以下十観

がおこるための方便とみているのです。

ところが、善導大師は、このことは弘願の密意があらわれたものであるとみているのです。そのことを、

「娑婆の化主、物のための故に想いを西方にとどめしめ、安樂の慈尊、情を知りたまうが故にすなわち東域に影臨したもう。これすなわち二尊の許応異なることなし、直ちにもって隠顯殊なることあり、まさしく器朴の類、万差なるによりて、互に郭匠^{くわくしやう}たらしむることを致す」

とのべています。

これは、釈尊がイダイケ夫人に対して、「苦惱を除くの法を説くべし」と仰せられながら、これを説かなかつたのに、その声に応じて阿弥陀如来が、空中にあらわれたのは、衆生の機類が利根、鈍根、善人、悪人などの差別があり、利根のものは、釈尊が説かれた定善觀を修してその利益をえられますが、末代の不善の機類は、その定善が相應しないから、苦惱をのぞく方法を説かれなかったのであります。

阿弥陀仏がその声に応じてあらわれたのは、定善を修することができない、濁意不善の機をあますことなく摂

取せんためでありまして、これは逆惡の機に相應する弘願をあらわすためであります。

八の像觀は、十三に分けられて、仏身を觀する予備として像觀の觀法が明かされています。

善導大師の觀法の特徴は、要するに理觀ではなく本觀であります。極樂はあるとおもえばあるし、ないとおもえばないというような想像の世界ではなく、それは、真實の世界です。無漏法性の世界ともいえます。

九の真身觀は、十二に分けて、淨土の真仏を觀する觀法が示されています。大師は、極樂淨土は報土であつて化土でないといわれており、弥陀の真身は、応身ではなくて報身であるという立場から、真身といわれているのであります。

十の觀音觀は、十五に分けて積され、「觀音願重くして十方に影現し、宝手輝きをとどめて機にしたがつて引接したもう」と讀じておられます。

十一の勢至觀は、十三に分けており、「勢至は威高くして坐するに他國をうごかし……法を演べて生を利し、永く胞胎をたち常に法界に遊ばしむ」とのべています。

十二の普觀は、六つに分けて、自身が淨土に往生する

すがた、往生しおわって仏、菩薩をみたてまつり、依頼正報の説法の音声聞くことを観想するのであります。

十三の雑想観は、十一に分けられて、上根上智の人のために大仏身、大菩薩身を説いたけれども、鈍根下智のものは、これを観することができないから、大身をすてて小仏小菩薩を観ぜしめ、行人の意に随って大身なりとも小身なりとも、自由に観ぜられるところから、これを雑想観といわれたのであります。

○

以上の十三観を総じて、善導大師はつぎのように讃じておられます。

「はじめに日観をおしえ昏闇をのぞき、水を想して水となして内心を淨む。……他は徳水を流して華中に注ぐ。宝楼、宝閣みな相接し、光々相照して等しくかげなし。

心をとどめて像を觀じ、静かにかしこに坐せしむ。一念心開いて真仏をみれば、身光相好うたたいよいよし。

救苦の観音、法界を緣じ、時として變じて娑婆に入ら

ざるなし。勢至の威光よく震動し、像に随って照摂して弥陀に会せしむ。

かえりなんいざ、極樂身を安ずる言にこれ精なり。……

普く勸む、同生の知識等、専心に念仏して西に向うて傾け」

(宮林昭彦)

藤吉慈海著

『法然上人御法語講話』上、下巻共

(上巻) B 6判 二四二頁 価一三〇〇円
(下巻) B 6判 二七八頁 価一五〇〇円

『阿弥陀經講話 附般若心經の話』

B 6判 一二八頁 価 六〇〇円

(発売元)

〒112 東京都文京区本郷五―二八―四

山喜房仏書林

振替(東京) 〇―一九〇〇

特 別 寄 稿

教化資料あさり雑記

◇

冒頭、私事になって恐縮であるが、忘れもしない。私は長かった学生生活を終え、京都のさる寺で、人生なんとかなるさと、半年間眠っていた。自坊に帰って敷かれたレールの上を歩む生活が、単調に映ったからであった。そんな時、大学より顔を出せとの連絡が入り、大学に戻った。そこで命ぜられたことは、この浄土宗文献センターを、何んとかしろ、ということであった。それは昭和四十八年十月のことであった。

ご存知ない方も多いと思うが、ここで当センター設立の経緯を記しておこう。

仏教、特に浄土宗の明治以後の出版物のなかで、伝道

堀 ぼり

隆 りゅう

廣 こう

(仏教大学
浄土宗文献センター主任)

教化の中心をなしているものは、ほとんど書物の体裁をなしてなく、図書館などにおいては「雑資料」とされ、充分な保存や整理がなされず、まさに読み捨ての状況にあったわけである。

浄土宗七千余カ寺が、明治以後発行した教化出版物を残りなく集める、そこには、一般の人とじかに触れ合う先人住職の血と汗の結晶があるはず、これを汲み出し積み重ねのある社会に適應した教化活動の素材を創り出していく、との構想のもとに、図書館棟の完成を見た昭和四十七年四月に開設されたのである。

◇

最初、私に与えられたのは、八十平米の空っぽの部屋





■蔵収資料

『浄土』発行の母体である法然上人鑽仰会の機関誌「法然鑽仰」

—— 茫なる献身、それが私達のモットーである。倒れてもいい茫々、この法流のために生きることができるならば——

第11号（昭和10年12月発行）「創立一周年の回顧より」抜粋

と、百万円の金と、重すぎる任務とであった。ただ、設立より一年半の間、隣りの仏教文化研究所の主事でもあり、同時に当センタ一の主任をされ、一応の基礎固めをして下さっていた高橋弘次先生の努力があったことを記さねばならない。

さて、教化資料の蒐集・研究の専門機関を持たない宗門だから、宗門大学として資料蒐集は一つの責務であらうし、青春をかける願ってもない仕事だと自負し、第一歩を踏み出した。こと資料蒐集に関しては、全くの門外漢。まして、明治以来百年間に亘る、思いも及ばない散逸している資料を集めていくなんて、目途もなく茫然としてしまった。

暗中摸索のなかで、蒐集・保存の方法や現存する資料を求めて、国立国会図書館や神田寺の明治仏教史編纂所など、十余ヶ所を見学した。訪ね先で規模を聞かれ、三階建の建物です、といかにも建物全部であるかのように答え、恥かしさを紛らわした。また、資

料整理に携わっている方に、過去の雑多な資料を整理するのは、定年を終えて余生を送る者の仕事。君の若い人生がもったいなくはないか、と問いかけられて、改めて自問したことなどは今となって、なつかしく思い起こされる開設当時の出来事である。

五里霧中を漂い、なにはともあれ「声」をあげなくてはと、「浄土宗宗報」誌上に広報記事やアンケート葉書を綴込んだり、全宗内寺院に寄贈依頼状を配布したり、思いつく手段をもって広報に努めた。また、種々の新聞に取り上げられたりもした。だが、私の期待が大きすぎたのか、手段がまずかったのか、明治は本当に遠く、戦禍は大きく、期待通りの飛躍的な蒐集成果は上がらず、また、資料蒐集はそんな安易なものであろうはづがなかった。

蒐集対象無限、存否不明の状況の中を、意気込みだけで、がむしゃらに集めようとしていた。そんな着手当初だったのである。



桃栗三年。手をかけて三年、その頃になると序々にではあるが、着実に資料が集まり出した。

過去の宗内教化資料を集大成して保存しているところは、皆無であったが、大正大学、神田寺などに、断片的に保存され、それを複写させて頂いた。特別に貸り出し大学に持ち帰り、徹夜でコピーの機械を動かしたことも、度々であった。その頃になって、資料複写は、経費、作業時間、現物資料の損傷などの点より、やはりマイクロ写真によらねばならないとの結論に達し、蒐集の手段に、マイクロフィルムの活用を取り入れ、半年かけてマイクロに技士の免許を得て、フィルム保存による蒐集を手がけ始めた。

一方、広報の効果が序々にあらわれ、大口の寄贈が相次ぎ、新潟、松山、広島など全国に出向いた。予想をはるかに超えた量があり、出直して運送店を使って回収したり、車に積み過ぎて道中でパンクしたり、散々なことも多かったが、みな歓びであった。ネズミの糞にまみれた資料が、勇気づけ、ロマンを抱かせてくれた。

それに、ややもすれば滅入る気持ちを奮い立たせてくれたのは、続々と寺院で発行されている「寺報」「伝道ハガキ」を始めとした、様々の手作りの資料を送って下さる寺院が、確実に増え続けてきたことである。

粗末なザラ半紙に住職自らが、ガリ版を切ったもの、三十年間も毎月欠かさず檀信徒へ送り続けられている「ハガキ通信」、子供の教化にと作られた美しい絵本やしおり、はては、日常生活と密着したマツチ箱、箸紙による教化資料など、血のにじむ教化活動を伝える資料で、部屋は埋ってきた。

ちなみに集まった資料は十余万点に達している。主なものの概数を記せば雑誌（各宗宗報も含む）五百種・三万冊、新聞三万点、リーフレット（寺報、機関誌）五百種・一万点、伝道ハガキ五〇種・三千点、書籍五千冊、マイクロフィルム五万コマ、などである。

買いたくともどこにも売ってなく、すべての資料は、もっぱら寄贈にたよってきた。よくもまあ、これだけ譲ってもらえたものだなあ、と実際感謝している。



大学に保存されるには貧弱で恥しいが、あるいは、兼職をして生活に追われる住職として懺悔の気持ちで出している、とか、寄せられるすべての資料に、それを踏み台として新しい文書教化の指針を打ち出せとの願いが添えられている。この要望に微力でも応えていかねばならな

い。今とりかかっている「寺報」に関する調査票も、連日、多数回送されている。その要望にざっと目を通すだけで、当センターへの期待の大きさに、襟を正している。急がれているのは、本年中に機関誌「教化リサーチ」の創刊を行うことである。寄せられた資料の中で、寺院教化に参考となる資料を具体的に写真掲載し、全浄土宗寺院に紹介していくという、ささやかなものである。期待の万分の一にも及ばないが、もっか編集作業に奮闘している。



かえりみれば、教化資料を散逸するままに放置し、寺院教化の有効な手だてに手を差し伸べられぬ宗門の現状を憂い、何はともあれ、今のうちに集めておかねば集まらない教化の資料を、大学として先駆的に集めてきたのである。

そしていま、全浄土宗寺院に活用を願って念願の機関誌を発行していこうとしている。だが、専任職員は、やっと本年度より二名という、まことに厳しい状況のなかで、大学としての限界を痛感する。

大学は、蒐集した資料を責任をもって保存し、社会に

適応した教化のために積極的に役立ててくれるのであれば、喜んで一宗に差し上げ、そして大学本来の浄土宗文献センターとして、学問分野の資料収集にまわる、この方針は、開設以来ずっと変っていない。



『浄土』創刊号(昭和10年5月)

○蒐集対象資料

書籍、雑誌、新聞、經典、カレンダー、パンフレット
リーフレット、ポスター、著書など教化文書全般
〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町96
仏教大学浄土宗文献センター

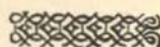
TEL (〇七五) 四九一一〇二三六 (内線261)

柿は八年。早く浄土宗にも曹洞宗の教化研究所などにまさるとも劣らない、現実社会に即した本格的な総合教化研究所の設立を、と願いつつ、寄せられる資料を手にする昨令である。

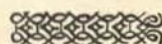
◎本誌『浄土』下記のもの欠号につき、お手持ちの方は
お譲り下さい。

(巻) (号)		(発行年)	
6	9・12	S	15
7	2・4・6・8・12	S	16
8	1・4	S	17
9	8・11・12	S	18
10	3・9・12	S	19
11	4・12	S	20
12	1・2・8・12	S	21
13	1・7・9・11・12	S	22
14	1・6・10・12	S	23
15	4・10・12	S	24
16	1・2・4・6・10	S	25
23	11・12	S	32
26	12	S	35

浄土句集



一田牛畝選



墓石に酒ふりかけて盆迎ふ
東京 鈴木 葉子

少し派手思ひて買ひしサンングラス
東京 栗原とも子

亡き父の浴衣折目のままにして
東京 真野よし子

誘はれて山の湯治へ老の秋
福岡 高良 慈風

門前の手花火殻を掃き寄せる
山形 松田 允子

石垣に簾をなして萩の寺
福岡 荒牧 還愚

兜虫被せし笹を押し進む
京都 安藤 寛

新しき下駄履き沙弥の棚経に
大分 丹羽 難中

たっぷりと生姜を卸し冷奴
東京 鳥居 千代

豆腐にたっぷりと置かれた生姜は、舌と鼻を楽しましてくれて、食欲を大いに増進する。

古き世の榮枯の道や草の花
福岡 上滝津弥音

評 憶良や道実等が踏んだ筑紫路は、昔も今も曼珠沙華や露草が咲いて、都府楼の礎石は、往時の榮枯を物語っているかである。

独り居の落着くところ秋の色
東京 吉田ゆきゑ

評 独り居は煩悩、雑念が、次から次に起る。然し秋ともなれば、色々の草の花が咲いて、春の草の華やかさとは違つて心落ちつく。

夫婦して彼岸詣でや秋日和
神奈川 松本せつよ

評 春の彼岸はただ彼岸と言うが、秋は秋彼岸と言う。秋日和でのどかな秋彼岸になる。

長崎は彼岸の供華に曼珠沙華
福岡 高良 幸代

評 供華の曼珠沙華にて秋彼岸である。そして、和蘭陀屋敷の曼珠沙華は長崎の花である。

大空に黄金の甍鑑真忌

東京 真野 竜

天高し詩を学びつ刀自達者

群馬 島津 か寿

下園を抜け湖を訪ねばや

東京 小笠原香祥

風鈴の程よき風や肘枕

東京 阪入志津枝

水打って客待つ心ゆかしけれ

東京 末常てる子

母の忌の仏間に飛べる赤とんぼ

東京 栗原やえ子

棚経の僧若くして声透る

東京 田中 秀代

若衆に近づく祭宵稽古

東京 阪入 等達

爽やかに京へ発たれし老夫婦

福岡 前田 秀峰

蛸の跡さすりて寝かす子守唄

東京 細田 初枝

打水の草に滴り光をり

東京 新井 新生

寺の秋沙弥を脇座に地鎮祭

福岡 国友 星畝

台風裡木の揺ぎいる路面鏡

山形 松田 光馨

魂送り孫子集ひて賑やかに

福岡 服部 光代

児等の食むクリーム溶ける暑さかな

福岡 永江 隆説

夜更けまで踊る老若孟蘭盆会

埼玉 佐久間愛子

蟬時雨境内広く昏なすむ

三重 山田 歌

何よりも寺族元気で盆を終え

福岡 釈河野ねはん

半夏生若僧作務衣翻えし

山口 三井 寛静

古里の栗なつかしくよばれけり

滋賀 松尾 郁芳

塗箸の先を逃ぐるや心天

福岡 堀 松月

飛行雲長々つづく花野かな

長野 原 幽遊

山莊のつれ／＼に挿す灸花

東京 猪瀬 幸子

客僧を送る島人波止小春

一田 牛畝



大乘仏教と法然上人

上野の

浩

わが国の仏教は大乘である。すなわち紀元前六世紀のころ、インドに起った仏教は釈尊の入滅後時日の経過とともに分派して、いわゆる小乗二十派を生んだが、その中の大衆部一派の流れは大乘仏教へと発展し、これが中国を経てわが国に伝来したものとされる。

大乘仏教は深遠かつ膨大な教義を包含するが、その中に「菩薩」という観念がある。ここにいる菩薩とは修行の結果人間として完全な境地に到達しうるもの、いいかえれば解脱して仏陀となりうるものをいうのであって、したがって菩薩の道を歩むものは誰でも菩薩たること

ができる。しかし多くの菩薩はただ自らのみ仏陀となるために修行をするのではなく、むしろ世の中のあらゆる人間をまづ救済しようとする自行と化他との両面において努力をするもので、これこそ大乘仏教の最高の理想とみることができよう。ところで大乘仏教の經典によれば「一切の有情は悉く仏性あり」と説明されている通り、いかなる人間もその本性は遂には解脱して仏陀になる可能性があるとすることなのである。これを実大乘ともいい、特に浄土教においてははこの考え方が基本となっており、すべてここから発展する。

それならば高度の修行を積みうる人とはともかく、あらゆる凡愚の人間が救われるのには実際にいかなる方法があるであろうか。『無量寿経』によると修行困難な衆生の救済の先導となり、衆生の赴く理想の浄土を樹立しようとした一出家修行者をあげている。それはかつて法蔵という比丘であって、誓願を成就して阿弥陀という仏陀になり、現在西方に極楽という仏国土を樹立しているという。この阿弥陀仏によって衆生が救われる方法については従来多くの仏教者が研究したことであり、中国においては曇鸞、道綽、善導、またわが国においても教信、空也、源信等を思い沙べることができ、鎌倉時代に法然上人が出るに及んでこの問題を明快に解決されたのである。

法然上人源空は天養二年（一一四五）、十三歳で比叡山に登り、持法房源光のもとに入室し、二年後の十五歳の折、阿闍梨皇円のもとで出家され、深く天台の教学を修められた。しかし上人はこれにあきたらず、十八歳の時に黒谷に隠遁し、叡空に師持し、一切経を通読すること五遍に及ぶ。爾後解脱をめざしてのながい求道生活をつづけられたが、上人の心の中は常にあらゆる人間を救う

方法についての思いで満たされていたのである。

『観無量寿経』によると人間が救われるためにはその機根に応じて上品、中品、下品の三つの階級があり、さらにそれぞれを上生、中生、下生の三つに分け、総じて九つの段階があることを述べている。しかし法然上人は世の中の多くの人間は殆ど貧しいもの、愚かなもの、無知なもの、悪業を重ねたものであると認識し、上人自らさえも「愚痴の法然」、「十惡の法然」という自覚に立たい求められたのである。『観経』にいう。「下品下生の者とは或は衆生ありて不善の業たる五逆十惡を作りて諸の不善を具す……十念を具足して南無阿弥陀仏と称す、仏名を称するがゆえに念々の中において八十億劫の生死の罪を除く」と。

法然上人の一生はこのような願望で支配されていたが、あるとき上人は中国の善導の『観経疏』に読み至った。その中にかの有名な一句「一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざる者、是れを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」に遭遇した。この一句は上人の胸につきささり、そ

の心の奥にわだかまっていた暗い霧は一点の曇りもなく晴れ渡って行った。

法然上人は『観経』の見方をこの一句によってさとられたのである。そこには最も低い下品下生の人間といえども、ただ一心に「南無阿弥陀仏」の名号を口にととなえさえすればそれでよいのだ、それが阿弥陀仏の誓願にしたがったものなのだ、そして極楽浄土に往生することができるのだと教えた。すなわち専修念仏の教えを開いたのである。これは極めて偉大な発見であって、時に承安五年（一一七五）、法然上人四十三歳の折で、この時をもつてわが国浄土宗の開宗の年とする。

遠い昔、インドの地に釈尊によって開かれた仏教はながい間に教理も体系も膨大な広がりを見せてきたが、法然上人によって悪業を重ねた愚かなものまでも含めたあらゆる人間が、特に解脱の最も困難な下品下生の人間がすべて救われる方法の発見という大乘仏教最高の理想に辿りつくことができたのである。この意味において釈尊以来名僧や仏教者は数多しといえども、大乘仏教の最大の理解者であり、かつ最高の仏教指導者は実に法然上人その人であるといっても過言ではないと思うのである。

「浄土教化トラクト」

『浄土宝暦』

B6判・表紙別三十八ページ

定価一部四十五円（二百部以上四十二円）

送料実費

◎檀信徒の皆様への新年のご挨拶等に恰好の施本となります。どうぞ広くご利用下さいますよう宜しくご注文をお願い申し上げます。ご便宜はできるだけおはかり致します。寺院名などの別印刷もうけたまわります。

発行 法然上人鑽仰会



念佛ひじり三国志 (空七)

―法然をめぐる人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

吉水の僧正と呼ばれた慈円は、九条兼実の実弟である。久寿二年（一一五五）四月、関白忠通を父として生まれた。保元の乱突発の一年三カ月前にあたる。示寂は嘉禄元年（一二二五）の九月二十五日だ。後鳥羽院ら三上皇が流島の難に遇った承久の変から四年目である。東坂本の小島坊で七十一歳の生涯を閉じた。

臨終の善知識は、あの日明遍にともなわれ西山善峰を訪れた法然の若き門弟善恵房証空がつとめている。

慈円七十一年の生涯は兵乱と政変にさらされている。

僧とは言えその出自から、また天台僧としてトップの座にいた彼は政治の渦から孤立することを許されなかった。

しかもなお「権門の僧」としての地位を保持し続け得たということは、慈円の変り身の素速さ、政治臭覚の鋭さを実証するであろう。

慈円は天台座主に補任されること、じつに四度に及ぶ。裏を返せばこの栄光の地位を四度辞していることになる。補任と辞職はおおむね九条家の廟堂における消長とタイミングを合致させている。兄兼実や甥の良経が失脚、退汐しはじめると、慈円はさっさと天台座主を降り

のである。

当然、この隠棲籠居は出家者のそれとは著るしく性格を異にしている。比叡山を下り市井に住みついて九条家と連繫を緊密にしたり、後鳥羽院が主宰する和歌所へ入りびたるのが隠棲なのであった。

絶妙に進退をコントロールしつつ慈円は七十一年の生涯を無事に生き抜いた。僧の身でありながら巧みに政治の枢機に接触し続けることが出来た。

では、慈円が意図した人生の目的とは何であったか。

政僧か。学僧か。それとも西行法師のような歌僧か。

どれも間違っているようだ。

慈円はいっさい官位に就かなかった。また護持僧や勸学になるが、じきに辞している。いつのころからそうだったかは分明ではないが、晩年の慈円は一途に歴史家を意図しはじめる。広く資料を蒐集し、この国の足迹を克明に綴る仕事に熱中するのである。承元（一二〇七）のころから書き起こしたと伝えられる「愚管抄」は、この国の貴重な史書となった。

ところで承元元年と言えば例の安樂、住蓮事件で法然が四国の讃岐へ流罪になった年だ。その直前に九条兼実

前号のあらすじ

兼実亡きあとの藤原一族の氏ノ長者、前太政大臣九条良経が建永元年（一二〇六）三月七日、三十八歳の生涯を突然に閉じたのは、まさに歴史の怪である。彼の命を奪ったその刺客には、「定家犯人説」などを推測する人もあるというが、刺殺された良経こそ不運であった。いずれにしても、叔父にあたる、『愚管抄』の作者慈円僧正の動きを例にとるまでもなく、京の都に暗躍する政争は鎌倉幕府の動きを横に見ながら、次第に承久の変へと導かれて行く軌跡を歩んでいた。後鳥羽院は、北面ノ武士のほかに、すでに鎌倉を念頭に置いた西面ノ武士を用意していた。

こうした情勢の中で、法然教団では善恵房証空が、その明暫な頭脳を駆使して、京都の政略を乗り切ろうと努力していた。一日、明遍がその証空を伴い、西山の善峰寺に出家住まいをしている慈円僧正を訪れている。

も死んでいる。

慈円は、法然やその専修念仏を信奉した兄兼実を、どのようにに見ていたのであろうか。

又建永ノ年、法然房ト云ウ上人アリキ。間近ク京中ヲ位ニテ念仏宗ヲ立テ、専宗念仏ト号シテ、タダ阿弥陀仏トばかり申スベキナリ。ソレナラヌ事、

顯密ノツトメハナセゾ、ト云ウ事ヲ云イ出シ、不可思議ノ愚痴無智ノ尼入道ニ悦バレテ、コノ事ノタダ繁昌ニ世ハ繁昌シテ強ク起リツツ、ソノ中ニ安樂房トテ泰經入道ガモトニ有ケル侍ノ入道シテ專修ノ行人トテ、又住蓮トガツイテ六時礼讃ハ善導和上ノ行ナリトテコレヲ立テ尼トモニ帰依渴仰セラルル者出デキニケリ

と「愚管抄」はきわめて法然を冷めたく批判している。天台の顯密を雜行として捨て去った專修念仏を、許しがたい邪法だとするのである。そして兄兼実については、

サテ九条殿ハ念仏ノ事ヲ法然上人ススメ申シテバ、信ジテ、ソレヲ戒師ニテ出家ナドセラレニシカバ、仲国ガ妻ノ事アサマシカリ法然ガ事ナド嘆キテンノ建永二年ノ四月五日、久シク病ニ寝テ起居モ心ニカナハズ臨終ハ良クテ失セニケリ

と書く。法然の邪法を信じ彼を戒師として出家した

が、建永二年（承元元年、一二〇七）四月五日に、法然の流罪を嘆きながら死んでいったとする。ただしその臨終は「良ク」——立派だった、とお義理のような文章で結んでいる。

慈円が信奉してきた旧仏教では、最終行儀こそが人生の価値を決定する重大事であった。奇瑞があらわれたり、従容たる悟性が死の床に満ち満ちていなければ尊敬に値する仏教徒とは言えないのである。

この文章の中段で法然の死にもふれているが「ツイニ大谷トイウ東山ニテ入滅シテケリ。ソレモ往生、往生ト云イナシテ人集リケレド、サルタシカナル事モナシ。臨終行儀モ増賀上人ナドノヨウニ云ワルル事モナシ」と貶する。

増賀上人とは十一世紀に生きた天台念仏僧であった。

天台座主慈恵僧正（良源）の門中だったか、やがて念仏ひじりとなって各地を遊行した。名利を嫌い、冷泉帝が護持僧に招こうとしたが口に狂言を唱え、身に狂事をなして逃げまわった。一条帝の母后が經典の聴講を求めると、粗惡野卑な暴言を並べたててヒンシユクをわざと買ひ、宮廷から遠ざかった。

＜常行三昧堂の親鸞＞



——カクノ如ク世ヲソムクノ方便甚ダ多シ。
と「法華経験記」は紹介している。

晩年は大和の多武峰に籠もった。死が近ずくと十余日
前すでにそれを予験し、大衆を集めて最後の説法を与
え、またくり返し念仏を勤修した。

みつわさす八十路あまりの老いの波
くらげの骨に逢うぞ嬉しき

こんな辞世の歌まで詠んで大衆に帰ってもらったあ
と、寢室にこもり坐禪を組んだ姿勢のまま正念往生を遂
げたのである。

同じ念仏ひじりであっても増賀上人はこんなに立派な
往生ぶりだった。それに比べて法然は……と慈円は価値
付ける。

だが、この文章を読んだら法然は静かに笑ったことで
あろう。

西方浄土へお導き下さる阿弥陀如来のお慈悲に差別は
ないはずである。行徳を深く積んだ名僧も、無知の尼入
道も同じである。平等に救われて極楽に往生する。

平凡な臨終相であつたればこそ、八十年間に及んだ法然の念仏生涯は正しかったのだ、と主張するであろう。増賀上人のように後世へ喧伝される仰々しさであつてはならないのである。

九条兼実の実弟で、臨終には西山証空上人に看取ってもらつたほどの慈円が「愚管抄」で法然を罵ることに、後世の人はとまどいをみせる。法然の身近にいたはずの慈円がなぜこんな文章を……この章だけは別人が書いたであろうとか、ひどいのは脳軟化の症状がすでに兆していたなどと、滑稽な言いつくろいをしたりする。

これはこれで間違いなく慈円の文章なのだ。天台念仏者の立場なら、法然の専修念仏は忌むべき邪法だつたはずである。

二

法然の若き弟子証空を西山の善峰へともないて慈円に紹介した明遍。彼と慈円とはどのような接し方をしてきたのであろうか。

明遍の兄弟には十指に近い高位の僧、学僧がひしめいている。彼らを通じて慈円とほだいぶ以前から熟知の間

柄であつた。だが思想、信仰の点でどこまで密着していたかは疑問である。むしろこの建永年間、法然の周辺に危険な色がちはじめたころから、一つの線上で重なり合う。

その線上とは「念仏」だ。

十三歳で出家以来、台密の教法を励んできた慈円が念仏に接触した機会は二十歳で大原に隠棲した折であろう。法華の学習につとめた過程だったと推量される。慈円は一年ほど大原に籠もり、こんどは比叡山の無動寺へ登り、千日入堂の修行にはいる。千日間、不断に続けられる難行である。

この行が終つた直後、慈円は兄兼実に隠棲を申し出る。千日入堂自体が隠棲みたいなものだが、この治承四年は以仁王の挙兵などがあり、これと連動して比叡山上の空気にはただならぬものがあつた。慈円はそこへ巻きこまれることを避けたにちがいない。千日入堂を成しおえた慈円は「真言阿闍梨」を容認されている。どんな勢力にかつぎ出され政争の渦に巻きこまれるか、はかり知れなかった。

この前後、九歳の親鸞が慈円を師として得度出家して

いる。東塔南谷の青蓮院本坊で、という「親鸞伝絵」の記述には疑問があるが、京都の白川房（後の青蓮院別坊）あたりでおこなわれたのは事実であろう。さらにその後の二十年間、直接間接に指導したことも間違いなからう。

ところで親鸞は、二十年間比叡山で何をしていたか。堂僧である。これは大正年間に西本願寺で発見された「恵信尼書状」で明らかである。

この文ぞ、殿（親鸞）の比叡の山に堂僧勤めておわしましけるが、山を出でて六角堂に百日籠もらせて結て、後世のこと祈り申させ給いける。九十日の暁の御示現の文なり……（中略）……九十五日の暁、聖徳太子の文を結びて示現に預からせ給いて候ければ、やがてその暁出でさせ給いて、後世の助からんとする上人に逢いまいらせんと尋ねまいらせて、法然上人に逢い参らせて……

親鸞の妻恵信尼は越後にいて夫親鸞の死を聞くや、娘の覚信尼へ書いた手紙のなかで親鸞の前歴をこう述べて

いる。

さて、親鸞が二十年間勤めた比叡山の堂僧とはどんな身分なのか。

堂衆、僧兵ではない。常行三昧堂に住し、不断念仏を修する僧である。

阿弥陀仏の名を念じ唱えつつ、道場内の仏像の周囲を歩きめぐる行だ。九十日間、これを修し終えれば十方の諸仏が行者の前に現れると言われている。

親鸞はほぼ二十年間、この不断念仏を主たる修法として励んできた。その道へ送りこんだ師の慈円が念仏に無関心であろう道理はない。

では常行三昧堂で念仏に励んでいた親鸞がなぜ比叡山を捨てて東山の法然のもとへ駆けこんだのか。不断念仏では「後世の助け」とはならぬと信じたからであろう。法然が主唱する専修念仏だけが救われる唯一つの道なのであった。

天台座主を四度もつとめ政僧として生きてきた慈円が、この建永年間あたりから急速に念仏へ接近していったようだ。ただしその念仏が法然の専修念仏でないことは「愚管抄」の文章でも明らかだ。比叡山伝統の不断念

仏だったにちがいない。

慈円の信仰上の動きには、明確な証言者がいる。ほかならぬ僧都明遍である。

「一言芳談」は十四世紀半ばに編された念仏者たちの言行録である。明遍やその弟子たちのものが多く収載されている。

敬仏房云ク念仏ノ法門ハ歌一首ニテ心得タルヨシ。

僧都御房ニ申スナリ。仰セテ云ク「サゾ」

タダ頼メ例エバ人ノ偽リテ

カサネテコソハ又モ恨ミメ

念仏の本義を歌で示した実例として僧都御房（明遍）は「新古今集」の歌を紹介する。

私を信頼せよ。かりに私が何度か嘘をかさねたら、そのときこそ恨みなさい。そんな意味であらう。

もう一つは、慈円僧正が亡くなったあと、明遍らしい人の枕辺に立った。そして語る。

「顕密の稽古は、ものの用にもたたず。時々せし空観と念仏とぞ後世の資糧となる」

空観は三論の哲理で、明遍の専門だったが、晩年の明遍が法然の念仏に傾斜したところから、やや語るに落ちたような慈円の夢言葉だ。しかし「時々せし空観と念仏」はなかなかリアルである。慈円の念仏が純粹な信仰思索から発したのではなく、時流に便乗しようとする姿勢を暗示してはいなくもない。

建永元年の秋である。西山の善峰寺だ。この書院からは眼下にひろがる洛南の平野が手にとるように臨めた。淀川の流れが「く」の字をえがいて南方へ伸びている。

明遍に向って平治の乱当時の記憶をことこまかに引き出していった慈円は、若い念仏ひじり証空の出自をただしたあと、再び話題を転じた。

「小禅師の兄者人もたしかこのあたりで示寂したのであったな」

「はい、遊蓮房と申しました」

「信濃守是憲——」

遊蓮房円照のことを慈円は話題にしている。

「この広谷で寂しました。ご存じでしたか」

「知るわけがない。平治の乱の折、わしは未だ五歳であ

った。これのなかでの知己じゃ」

と、積み上げた関連書類の山を指さした。

法然御房が臨終に立ち会われ、見事な念仏往生だった、と言いかけて明遍は口をつぐんだ。

「念仏は魔物じゃな」

突然、慈円が言いだしたからである。

「魔物とは、どういう意味でしょうか」

若い証空が気おい立ったような表情になった。

「以前わしの弟子で、比叡山にいて持戒堅固な僧がおった。窮屈な男で、いつも鹿爪らしい顔をしていた。それが京の街へ下り、法然の弟子の説法を聞いたらしい。たちまち共鳴してなその門弟になったわ」

「そのお弟子とは何という名のひじりでしょうか」

証空は鋭く訊いた。

「名前などどうでもいいわな。奴らはしよつ中、荒れ寺に集って、説法や称名念仏の集会を持つらしい。女人の信者も混じっており、魚や鳥肉を焼いて食べ、酒も飲むらしい。あげくのはてが、男女の乱交じや」

「そんな破戒が……」

「おこなわれているのじゃよ。現にわしのもとへやって

きて得々と語りおった。しかも奴の顔からは以前の暗さ、鹿爪らしいものが消え失せておる。如何にも自由闊達になったかのようにや。念仏をひと声、唱えさえすれば何をしてもよい。このように解放される、救われる、とな」

「極端な専修には、そんな手合いがいるんです」

証空は溜め息を洩らしている。

「いくら末法末世とは言うても、未だそこまでは仏の慈光は消えておらん」

「そのとおりです」

「阿弥陀仏だけがすべてを救うと申すのは、悪魔の妖言じや。悪魔にはな、物ごとと逆らってアダをなす者と、人々を従わせるものがある。順魔逆魔という。一向専修の徒は、この順魔じや。猛々しく人間にアダをなしては来ぬ。人間の煩惱を巧みに刺戟して悪徳を積み上げる」

慈円の舌鋒は鋭さを増してきた。明遍は言葉をさしはさんだ。

「それでも、正しい念仏というものも実在しているのでしょう」

＜四十八巻伝＞



「無論、実在する。わしは今その弘布を心がけておる。これには院も同じご意見じゃ」

「院……後鳥羽上皇もですか」

明遍はちょっと驚いた。熊野への参詣をくり返し、この国の神祇思想の復活に邁進している上皇が、念仏弘布に気持を傾けているとは。

「善きにつけ、悪しきにつけ、今やこの日本国は念仏なしでは明け暮れぬ。世の政治にたずさわる者としては当然のことじゃ」

慈円はきっぱりと言い切った。

三

三人の話題、とは言ってもしやべるのは殆んど慈円僧正であったが、若き証空の養父にあたる内大臣久我通親に及んだ。

宮廷の惑星、ひところは九条家を追放までした煉腕の政治家である。

慈円自身も通親にはひどい目に遇っているわけだが、今はすでに亡く、回想の線上に通親を置き換えると、慈円はしごくなつかしげであった。政敵ながら通親の手腕

に小気味良さを感じていたのであろう。

「おぬしもかの博陸（通親）の猶子であれば、彼の半分の智慧をめぐらせて、念仏教団を正しい進路へ戻さねばならぬ。浮浪者に似た一向専修の徒から奪回することじや」

と激励する。若い証空の頬はかがやいた。

「必ず……必ずわが師法然さまを、お救い致します」

「とにかく一度、法然をここへ連れてまいらぬか。わしもとっくりと話し合ってみたい」

「わかりました」

証空は感激して慈円に誓った。

この誓いが実現したのかどうか。

「四十八巻伝」（円光大師行状図絵）は、その巻十五をすべて慈円僧正に割いている。

アル時シバラク西山ノ善峰寺ニ籠居シテ心ノドカニ勤メ行ワレケルニ、イツシカ勅使ヒマナクシテ、ツイニ召出ワレ給イニケリ。ソノ後ハ隠居ノ住マイモカナワザリケレバ、ツネニ上人ニ御対面アリテ、底下ノ凡夫開悟得達ノ要義ヲ談セラレケルニ、

上人諸宗ノ大綱ヲアゲテ……（中略）……苦海ノ船師愛河ノ橋梁ニテ愚鈍下智ノ当機ニアヒカナエルトテ、聖道浄土ノ奥義ヲ述ベラレケレバ、和尚隨喜ノ御心ネンゴロニシテ、一乗円戒ヲ受ケ、敬心称名ノ行ヲ崇重セラレケル

つまり当時の法然はしばしば慈円と会って浄土の法文について語り合った、と記述する。しばしばは疑問であるにしても、どこかで対面したのは事実であろう。

「愚管抄」の法然順魔説を読んだ史家は、慈円と法然との語り合いなど、それこそ架空会談だと否定し去る。

「四十八巻伝」のこの節は虚構だとさえ断定したがる。

だが、筆者は確実に法然・慈円の会談はあり得たと信ずる。

だいたい「四十八巻伝」は、法然の偉大さを強調した内容の羅列だが、その護教ぶりさえ削去して事実の骨格だけを撫でてゆくと意外なりアリティに随処でめぐり遇う。

法然・慈円会談はまさしく事実であって、慈円の感動を「聖道浄土ノ奥義ヲ述ベラレケレバ」に根拠を置け

ば、架空虚構などとは言えなくなるであろう。

二人はゆっくり逢って、多分証空あたりが周旋した会谈であろうが、大いに談じ合ったにちがいない。そこで慈円は聖道浄土を主張したのであろうし、法然はまた専修念仏路線を一步も譲らなかった、と推察した。

とことんしやべり合ったからこそ「愚管抄」のあの非難なのだ。ろくに面談もしないで、あそこまで法然をやっつけるとは、逆に考えられないのである。慈円が法然の膝下に心服したとは後世の尾ヒレ端ヒレであって、お互いが自談を主張し合った会見にちがいない。

また、この会談を傍らで聴いた善恵房証空は、いよいよ法然の身辺に及ぶであろう危機感を実感として受け止めたはずである。建永の法難に処した証空の、今日でいう背信行為も、それあるがためにこそ、と領解しなければならぬのである。

護教的な曲筆舞文を否定するあまり、事実までも削去してはならない。

慈円が法然との会談を希望したことも、彼が何よりも生家の九条家、兄兼実の身を憂慮する立場から、充分に納得できる。ラジカルな一向専修の徒に振りまわされて

いるらしい法然を、天台念仏の線へまで連れ戻し、新宗の念仏教団を合法化してやりたい意図が、慈円にあったことも間違いあるまい。

その前後、明遍は何度か西山の善峰寺に慈円を訪ねてゐるはずだ。「愚管抄」の執筆が開始され、慈円は明遍の見聞や記憶を必要としたからである。当然、若き証空も同行している。

ある日の善峰寺でだった。

兩人がはいってゆくと、慈円のかたわらに聡明そうな一人の武士が坐っていた。

「西面ノ檢非違使で三浦秀能と申す者」

と慈円は紹介した。

どちらも初対面だ。なぜこんな男が善峰寺に、と明遍は不審に思った。檢非違使なぞ犯罪でもおかさぬ限り、慈円にとっても無縁であるはずだからである。

「うむ。秀能はな、和歌所の寄人でもある。つまりわたしとは歌仲間というところじや」

兩人の不審を晴らすように慈円は説明した。

歌を受したこの僧正である。その仲間がいても自然であらう。

「ところで、この間頼んだ東山における過激な専修ども、人脈が掴めたかな」

慈円はさっそく訊いてきた。この前、別れたとき過激な念仏者たちの詳細な実態報告を頼まれていたのである。

「はい。やはり急先鋒は安楽房でございます」と証空は告げた。

「中原師広か。遵西とか僧名を申したな。それで鎌倉武士とは？」

「ひんびんと連絡をとってっおるようでございます。鎌倉には彼と同族にあたる中原広元（——大江広元）が在任しておりますゆえ。ただし、鎌倉へ下向してゆくのは安楽房自身よりも仲間の住蓮房のようで」

「住蓮か。それで安楽房が京で親しく接触しているのは、どんな向きかな」

さながら訊問ではないか、と明遍は慈円僧正を見た。

「仁和寺御所、御室の御母君……」

「ほほう、坊門局であるか。なるほど坊門局だとすると、鎌倉ともつながりは深いな。妹君が將軍実朝の御台所じゃかな」

「六時礼讃を通じて、じっこんのようであります」

「六時礼讃か。それで、専修の墮落者どもは女犯にもふしだらと聞くが、その安楽房と御室の母君との間で、密通関係はないのかな」

「そこまでは聞いておりませぬ」

「あれば、いっそう話が面白くなるのう」

慈円はかたわらの三浦秀能をかえりみて笑った。

秀能はことりと表情を動かさない。ぶ気味な男だった。

「彼らが鎌倉と連絡を密にする目的はいったい何か」

「よくは判りませぬが……」

しばらく考えこんでいた証空は、やがて重大な推測を洩らした。

「念仏ひじりたちに武器を持たせ、いざことあるときは六波羅の武者所へ合流させるのではないか、とも噂されております」

「ナマダサに女犯に、こんどは武闘の準備か。いよいよ以て怪しからぬ専修どもじゃな」

史家を認ずる慈円は寛達な言葉をくり出していたが、三浦秀能は片頬がひつつてしまうほど緊張して、証空の言葉に聞き入っていた。

(つづく)

二 編集後記 二

○「行秋や波濤万里の海に対（た）つ」——敬愛する木下隆一氏の一句である。評すれば——人生の秋、晩秋もすでに過ぎ去ろうとしている。今この時、作者は波濤万里の大海に一人対峙している。海とはこの場合、人間の生の対極にある死の深遠を比喻しているものであらう。この作者の人間としての雄渾さが見事に十七字の文字の中にこめられて、まことに壮大な一句となっている。——ところで私には、こんな凄味のある作句は到底できない。あまりにも脆弱で、矮小であるために、目先のことばかりがちらついて、はるかなる遠き果ての世界を見はるかすことはできないのである。まことに残念なことであるが、それでも臆面もなくここで一句駄作を披露すれば、

浜の秋貝殻ひとつ夢ひとつ　ゆう一
となる。

○ところで弊会でも、明年の善導大師千三

百年のご遠忌にちなんで、また『浄土』誌創刊以来四十五周年という記念行事ともあわせて、来秋には幾つかの企画を準備している。そして、その一端として、とくに『浄土』誌の特別号を、会員諸兄のご希望にあわせて印刷する用意をしているわけである。というのは、全国の各寺院で善導大師のご遠忌法要を営まれる折、その施本用として、とくにその月の『浄土』誌に、利用寺院の紹介宣伝をかねたページとして別刷を捜入して広くご利用していただきたいわけである。別刷増ページへは、その寺の縁起や写真等を、ご要望に従い、当方で編集させていただくつもりであるが、諸種の用意の關係上、およそ使用される二カ月ほど前に、ご連絡下されば幸いである。なお、詳しくは弊会の方へお問い合わせ下さるようお願いしたい。どうか弊会のもう一步の前進のために、どうぞ暖かい御支援をお送りいただきたい。また『浄土』誌ご購読を、広くご紹介願いたい。

「浄土」購読規定

会費一カ年　金二、五〇〇円

（送料不要）

浄土　四十五巻　十一月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十四年十月二十五日　印刷
昭和五十四年十一月一日　発行

編集人　宮　林　昭　彦

発行人　佐　藤　密　雄

印刷人　関　二　三　男

印刷所　長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所　法然上人鐵仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103　振替東京八―八二―一八七番

＝新発売＝ **ねん じ ぶつ**
念 持 仏



○お在家の方々の中には、ご仏壇をお持ちでも、阿弥陀如来をおまつりしていない方、お位牌だけおまつりしている方が意外に多いのではないのでしょうか。この様な方々のために、仏壇用として念持仏を謹製いたしました。中央に阿弥陀如来、左右に高祖善導大師、宗祖法然上人の尊像をおまつりした携帯にもお手頃な仏様です。この念持仏は、中央が割れない特殊な鏡になっているのが特徴です。日々夜々、心の汚れを鏡の面に写して反省しながら、浄土の信仰を深めて下さい。どうか多くの人々の魂棚におまつりしていただくことを切望します。

定価 一体 2,500 円 (五十体以上は一割引)

送料 一体 200 円 (五十体以上は無料)

●寸法 21.8cm × 14cm 3 枚折・実用新案登録済＝番号53-044860号

(発売元) 〒153
東京都目黒区目黒 4-16-12

株式会社 泰 童
TEL (03) 711-6006

(取扱い) 〒102
東京都千代田区飯田橋 1-11-6

法然上人讃仰会
振替(東京)8-82187番